**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第３７回　（２０１７年　１０月２４日）**

**・第３７回の勉強範囲：「第一章　師と弟子」１０～１２頁**

・📖 （読む）「師と弟子」　１０頁上段Ｌ７～Ｌ９

*つづけて、彼はおっしゃった、「はバラ色の夜明けのようなものだ。夜明けのあとに太陽が現れる。渇仰のあとに、神のヴィジョンがつづくのだ。*

（解説）

太陽は、夜明け前にも絶対にありますね。

原文では、アルナ（aruna）という言葉を使っています。

アルナはサンスクリット語で「夜明け前の太陽」のことです。

「現れていないけれど、絶対にある」という意味です。夜明け前に太陽がある印として、**空は赤く、明るくなります**ね。そのイメージです。アルナのあとに、スーリヤsérya（太陽）が現れます。

「あこがれ」と「渇仰」はどちらも英語でearningですが、日本語の意味の違いは何ですか？

生徒「渇仰は激しく求めるイメージで、あこがれはもっとぼやっとした気持ちです」

激しく求める、これが渇仰ですね。神様を見たいというとても強い渇仰が出ますと、神様のヴィジョンはすぐに出ます。シュリー・ラーマクリシュナは、どれくらい強い渇仰が必要かというイメージを沸かせるために、３つの例を使って説明しました。

・📖 （読む）「師と弟子」　１０頁上段Ｌ１０～Ｌ１４

*神は次の3つの魅力の集まった力で、に引かれる信者に御姿を現される―世俗の人にとっての財産の魅力、 母親にとってのわが子の魅力、および貞淑な妻にとっての夫の魅力である。もし人がこれら三つの魅力の結合した力で神に引かれるなら、それによって彼を悟ることができるのだ。*

（解説）

我々にはこのような経験がありますね。経験がなくてもいつも見ています。

**神への渇仰は、３つの感情を合わせたくらい強くなければならない**

**①世俗の男の富への愛**

例えば、ビジネスマンはいつもお金のことを考えています。「どうして赤字になったんだろう」とか「どのようにすればもっと黒字になるんだろう」といつも損失と利益のことばかり考えています。寝る時も、夢の中でさえ考えているかもしれません。その人の人生のすべてで損失と利益について考え、他のことを考える時間も興味もありません。ずっとそれだけです。そのことだけに気持ちがフォーカス（集中）していますので、趣味もありません。他のことを話しかけられても全く興味が持てません。

**②母親のわが子への愛**

子供が赤ちゃんの時、お母さんは常にずっと心の一部分を子供に向けています。

メイン・フォーカスの対象が子供です。昔は子供がたくさんいましたが、今は一人っ子も多いですので、その子に対するフィーリングはとても強いですね。

**③貞淑な妻の夫への愛**

「貞淑な」を英語でchasteと言います。貞淑な妻は旦那さん以外の男性のことを全然考えません。自分の行動はすべて旦那さんが喜ぶかどうかが基準です。その感情はとても大きな感情ですね。

そして、それらの３つを合わせますと、どれくらい気持ちがフォーカスして、どれくらいの強い感情になるか。それを実践するのはちょっとむずかしいですが、できるだけいかにすごい感情と集中が必要かを理解してください。そしてそのようになれば、神様のヴィジョンが得られ、神様を理解できます。

・📖 （読む）「師と弟子」　１０頁上段Ｌ１５～下段Ｌ５

*要はまさに母親がわが子を愛するように、貞淑な妻が夫を愛するように、世俗の男が富を愛するように神を愛することである。これらの三つの愛のちから、これら三つの魅力を合わせて一つにし、それを全部神に向けよ。そうすればお前は、間違いなく彼を見るだろう。*

*渇仰の心で神に祈ることが必要である。子ネコは、『ミュウ、ミュウ』と鳴きながら母親を呼ぶことしか知らない。どこでも母親が置いてくれたところに満足して、そこにじっとしている。そして母ネコは子ネコを、あるときは台所に、あるときは床に、あるときは寝台の上に置く。つらいことがあると、子ネコは『ミュウ、ミュウ』と鳴くだけだ。それが子ネコの知っていることの全てなのだ。しかしこの鳴き声をきくやいなや、母ネコはどこにいても子ネコのところにとんで来る」*

（解説）

**シュリー・ラーマクリシュナ自身が強い渇仰を持ちつづけ、神のヴィジョンを得た**

『ラーマクリシュナの生涯』を読みますと、シュリー・ラーマクリシュナ自身がその種類のあこがれと渇仰を持っていたことが分かります。

シュリー・ラーマクリシュナは毎日夕方になると、母なる神様に「今日も一日が過ぎたのに、まだあなたは現れていない」と言ってガンジス川の土手に顔をこすりつけながら泣きじゃくりました。子供がおねだりしたときに、欲しいものがもらえないと、寝転がって地団駄を踏みますね。そのような感じでシュリー・ラーマクリシュナは「マザー、マザー」とマザーのヴィジョンを渇仰しました。

それを見た大人たちは、マザー・カーリーのお坊さんは変な人になったと思いました。しかしシュリー・ラーマクリシュナはマザーへの渇仰が強いあまり、他の人から見られているという意識も全然ありませんでした。そしてマザーのヴィジョンへの渇仰は約12年間も続きました。毎日毎日いろいろな実践し、マザーを渇仰し、そして泣きました。

そしてついにマザー・カーリーは現れたのです。

「もし皆さんが本当に神様を悟りたいなら、それくらいの渇仰がないと無理です」とシュリー・ラーマクリシュナは子ネコの例を使って言っています。

皆さんは口では「おお、シュリー・ラーマクリシュナ、今日も一日が過ぎましたが、まだあなたは現れていません」と言うことがあるかもしれませんが、感情が伴っていません。本当の渇仰ではありません。シュリー・ラーマクリシュナの渇仰心がどれほどすごいものかを想像してください。

**子ネコのやり方は、ミュウミュウ（お母さん、お母さん）と鳴くだけ**

子ネコのやり方はただ一つです。「ミュウ、ミュウ（お母さん、お母さん）」と鳴くことだけです。お腹がすいたり、なにか大変なことが起こると、「ミュウ、ミュウ（お母さん、お母さん）」と鳴くだけです。なんでもお母さんです。それくらいお母さんのことを考えますと、絶対にお母さんは現れますね。

我々の状態は子ネコのようではありません。もちろんお母さんを呼ぶときもありますが、遊ぶことが好きで、遊んでいる時にはお母さんのことを全く忘れてしまいますね。

では、どうすればいいのでしょうか？

**遊びをやめておもちゃを捨て、泣いて母を呼ぶと、母はすぐに来る**

子供はいつも何かに夢中になって遊びます。お母さんは、子供が遊んでいるあいだは、自分の仕事を一生懸命しています。しかし、ひとたび子供が遊びをやめて、おもちゃを捨て、お母さんが恋しくなって泣き出すと、お母さんは忙しくてもすぐに子供のところに走ってきてくれますね。

これも一つの方法です。

**神様に集中する**

フォーカスしなければならないのは、マー、お母さん（神様）です。

シュリー・ラーマクリシュナも子ネコも「お母さん、お母さん」と呼びました。そうするとお母さんは絶対に来ます。

我々がそれくらいの渇仰を持つことができるようになるためには、ジャパなどの実践をずっとします。そうするとだんだんのその状態になることができます。

たとえ我々がシュリー・ラーマクリシュナの真似をして、土手に顔をこすりつけて泣いても、神様はそれが真似だと知っているので、それでは神様は現れません。だんだんと自然に渇仰が沸き起こるまで実践してください。

毎日実践してください。

→そうすれば神様に対する愛が増えます。

→神様への愛が増えると、神様のことにフォーカス（集中）することができます。

我々には、仕事があり、親戚や友達がいて、さまざまなことに気持ちが差し向けられていますね。それを神様にだけ一点集中させなければなりません。

例えば、太陽の光を凸レンズに集め、黒い紙にその光を当てますと、紙は燃えますね。それくらい一点に集中してください。

**信仰深いイスラム教徒がアラーに集中した例**

実際に5,60年前に東ベンガルであった話をします。

ある診療所でヒンドゥ教徒のお医者さんが、診療時間直前に診察室で座っていました。そこに一人のイスラム教徒の青年がやってきて「先生、父の具合が悪くなったので、すぐに来てください」と言いました。お医者さんは、少しためらいましたが診察に向かいました。病人の部屋に入る前にお医者さんは小さな音を聞きました。それは、咳や呼吸の音のようではありませんでした。中に入ると7,80歳くらいの老人が横たわっていました。その方は漁師でした。お医者さんは聴診器でまず心音を調べました。そしてびっくりしました。なぜなら「アラー、アラー」と聞こえたからです。お医者さんはさらに心臓以外の場所も聴診器で聞きましたが、すべて「アラー、アラー」と聞こえました。

病人はもうすぐ亡くなりそうでしたので、お医者さんはそのことを息子に伝えました。それで息子は父に「お父さん、私に何かメッセージをください」と言いました。

すると父は、

「ほかの人を傷つけない、心の中でさえ、他の人を傷つけることを考えないでください」

と言いました。

そのうちにイスラム教徒の祈りの時間が近づいたので、父は息子に外に連れ出してくれるように頼みました。そして父は外でアラーの御名を唱えました。そして礼拝が始まりました。老人は礼拝の最中にもう一度はっきりと「覚えておいてください。けっして他の人を傷つけない、心でも傷つけるようなことを考えないように」と言いました。

そして礼拝が終わると同時に亡くなりました。

イスラム教徒の老人の体のすべてから「アラー」という音が聞こえてきたのはなぜでしょう？

なぜなら、彼は以前からずっと深い信仰を持って神様の名前を唱えていたので、最終的には体のすべての細胞からその音が出たのです。

彼の親戚は、どれくらい彼が霊的に高いレベルであったかを彼が亡くなってから理解しました。

彼は漁師であって、聖者ではありませんでしたね。この例のように、聖者ではなく、普通の仕事をしている人でもそのような状態になれます。

これは特別な例ではありません。例えば、ある聖者が亡くなり、そのお墓に行くと「ハレー　クリシュナ、ハレー　クリシュナ、ハレー、ハレー」という言葉が聞こえてくるということがありますから。

・📖 （読む）「師と弟子」　１０頁下段Ｌ６～Ｌ２２

*Ｍが三度目に師を訪れたのは日曜日の午後であった。彼は、この驚嘆すべき人への二度の訪問から深い感銘を受けていた。彼は、師のことと、霊性の生活の深い真理を説明なさる彼のまったく簡単な方法とを、絶えず考えていた。いまだかつて、このような人に会ったことがなかったのである。*

*シュリー・ラーマクリシュナは、小さいほうの寝台の上にすわっておられた。部屋は、休日を利用して師に会いに来た信たちでいっぱいだった。Ｍはまだ、その中の誰ともなじみがなかった。それで隅の方に席をとった。信者たちと話しながら、師は微笑なさった。*

*彼はとくに、ナレーンドラナーという一九歳の青年に向かってお話になった。彼は大学生であって、シャーダーロン・ブラーフモー・サマーに出入りしていた。彼の目は輝いて、言葉は活気に満ちており、その顔は神を愛する人の表情を帯びていた。*

*Ｍは、会話は霊的なものを切望する人びとをする、世俗的な人びとについてである、と推測した。師は、世間にいる非常におおぜいのそのような人びとについて話し、また彼らとつきあう方法について話しておられた。*

（解説）

**神様が嫌いな人は神様を好きな人を批判する**

ナレーンドラナートとは、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダのことですね。

世俗的な人は、神様を好きな人のことを頭がおかしいと考えることがあります。

最近の日本では神様を好きではない人が多いです。「神様はいない」とか「神様は迷信」と考えている人がたくさんいます。その人たちは神様を好きな人に対して、「知能が低く、迷信を信じる人、ふつうではない人」だと、間違った考えをしています。とても残念です。インド人は神様を好きな人が多いですが、神様を好きではない人も少数派ですが存在します。どこの国でも神様を全く好きでない人は、神様を好きな人を批判します。

もう一種類のタイプの人がいます。

その人は神様を信じています。しかしそれほど深く神様のことを考えません。

例えば仕事を成功させるために、ガネーシャやラクシュミーを礼拝する。そこまでです。その人よりも、もっと神様のことが好きでお坊さんになりたい、という知人がいると、そこまでしない方がいいと考える人がインドでも結構います。

・📖 （読む）「師と弟子」　１１頁上段Ｌ１～１１頁上段７

　*師（ナレーンドラに）「お前はそれをどう感じるかね。世間の人びとは霊的な心を持つ人びとについていろいろなことを言う。だが、ごらん、一頭のゾウが街を歩いて行くと、野良犬やその他の小さな動物たちが、いくらでも出てきてそれにほえつくだろう。しかしゾウはふり返りもしない。もし人びとがお前のことを悪く言ったら、お前は彼らのことをどう思うだろうか」*

*ナレーンドラ「私はイヌがほえついていると思うでしょう」*

（解説）

スワーミージーはとても強く勇気もいっぱいでしたから、神様が好きな人を批判する人をイヌみたい、と言いました。

・📖 （読む）「師と弟子」　１１頁上段Ｌ８～１６

　*師（微笑して）「いやいや、そこまで行ってはいけない、わが子よ（みな笑う）。神はすべての生きものに宿っておられる。しかしお前たちは善い人びととだけ、親しくしたらよいのだ。悪い心の人びとは避けるようにしなければいけない。神はトラの中にもおられる。しかしそれだからといってトラを抱くわけにはいかないだろう（笑い）。お前たちは『トラもやはり神の現れなのに、どうして逃げなければならないのですか』と言うかもしれない。それに対する答えは、『お前たちに逃げろと告げる人びともやはり神の現れ―それゆえ彼らの言うことはきくべきではないか』というものだ。*

（解説）

これはとてもとても実践的な助言です。

なぜなら、ヴェーダーンタではすべてはブラフマンですね。

サルガム　カヴィヴィーリダム　ブラフマン　　すべてはブラフマンです。

私は信者の方からよく「もしみんながブラフマンだったら、良くない人もブラフマンですよね。私はその人とどのように話をしたり、関係を持つべきでしょうか」という質問を受けます。

それについては、ヴェーダーンタのアイデアが２つあります。

**ヴェーダーンタの２つのアイデア**

**①パラマーティカ(偉大な真理)**

パラマーティカparamāthika[形容詞]

パラマータparamāta [名詞]＝パラマ（偉大な）＋アータ（アイデア）＝偉大な真理

パラマータ(偉大な真理)の見方で、すべてはブラフマンです。

②**ヴャーヴァハリカ(どのように行動するか)**

ヴャーヴァハリカvyāvaharika [形容詞]

　ヴャーヴァハラvyāvahara[名詞]　＝　振る舞い

パラマーティカの見方で、「すべてはブラフマン」ですね。

ヴャーヴァハリカの見方では、「仕事、働き、人間関係においては、区別をしてください」です。仕事をするときや人間関係を作るときには絶対に良い人と悪い人を区別しないといけません。

人には良い人と悪い人がいますね。パラマーティカの見方では、どちらもブラフマンですが、我々が人間関係を作ろうと思うときは、ヴャーヴァハリカの見方で識別をして、良い人とだけ人間関係を作ってください。悪い人は避ける必要があります。そうしないと問題が出ます。なぜなら悪い人はあなたを傷つける可能性がありますから。

・📖 （読む）「師と弟子」　１１頁上段Ｌ１７～下段Ｌ１６

*一つ話をきいておくれ。森の中に一人の聖者が住み、おおぜいの弟子を持っていた。ある日、彼は弟子たちに、すべての生きものの中に神を見よ、そしてそれを知って彼らすべての前に頭を下げよ、と教えた。一人の弟子が、の火の薪を集めに森に行った。突然、彼は『逃げろ！　気の狂ったゾウが来るぞ！』という叫びを聞いた。彼を除く全部は逃げた。彼は考えた、ゾウもやはり別の形で現れた神であると。それならなぜ逃げねばならないのか。彼はじっと立ち、動物の前に頭を下げてそれをたたえる歌をうたいはじめた。ゾウ使いは『逃げろ！逃げろ！』と叫んでいた。しかし弟子は動かなかった。ゾウは彼を鼻でつかんでわきに投げ、行ってしまった。*

*傷ついて出血し、弟子は気を失ったまま地面に横たわっていた。事件を聞いた師と兄弟弟子たちは、現場にやってきて彼をアーシュラムに運んだ。薬の効きめで彼は間もなく意識をとり戻した。誰かが『君はゾウの来るのを知っていたのだろう？　なぜ逃げなかったのか』とたずねた。『でも師が、神御自身は人間ばかりでなく動物の姿にもなって現れているとおっしゃっただろう。だから、来るのはゾウ神様だと思って逃げなかったのだ』と彼は言った。これをきいて師は言った。『そうだ、わが子よ。ゾウ神様がいらっしゃったというのはほんとうだ。しかし、ゾウ使い神様がお前に、そこにいることをとめただろう。すべてのものが神の現れなのに、お前はどうしてゾウ使い神様の言葉を信用しなかったのだ。お前はゾウ使い神の言葉に耳を傾けるべきだったのだよ』と（みな笑う）。*

(解説)

ゾウだけでなくゾウ使いも神様である、という識別、区別についての分かりやすい例ですね。

**区別、識別をする**

①「良い」と「悪い」を、区別してください。

②包括的に区別、識別してください：

全体的なことを考えるとすべてが神様ですが、弟子は「ゾウ」だけを神様だと思っていました。「『危ない』と声をかけた人」を神様だと認識していませんでしたね。識別が一部分にしかなされていないからです。

そして、たとえすべてがブラフマンであるという知識を持っていても、識別と区別が大事です。違いを見極めることが必要です。そうしないといっぱい混乱が出ます。

**神様を識別できなかったイエスの信者の例**

ある時、川の水位が上がり、洪水になりました。その時イエスの篤い信者が、「イエス、どうか、現れて私を助けてください」と祈りました。

その時、手漕ぎボートがやってきて「どうぞ乗ってください」と言いました。しかしイエスの信者は「イエスが来ます。イエスが来ないと私は行きません」と言って、ボートに乗りませんでした。水はどんどんあふれています。次に動力付きボートがやってきて「どうか安全なところまでこのボートに乗っていってください」と言いました。しかしイエスの信者は「イエスが絶対に助けに来てくれます」と言って、また乗りませんでした。最後にヘリコプターが来て、ロープを下しました。そして「ここはもうすぐ水没します。早くロープにつかまってください」と言いました。それでも信者は「イエスが来ます」と言って、拒否しました。そしてついにその人は溺れて天国に行ってしまいました。

天国でその人はイエスに会って文句を言いました。「イエス、私はあなたの篤い信者です。あなたはいつも私を守るとおっしゃっていました。それなのに私が何度も呼んだのに、どうして来てくれなかったのですか」

イエスは答えました。「私はあなたを守るために3回も人を送りましたよ。最初は手漕ぎボート、それから動力付きボート、最後にヘリコプターで送りましたが、あなたは来ませんでした」

ボートやヘリコプターで助けに来てくれた人も神様です。神様がいろいろな形で現れたのです。彼は、神の使いとして来てくれた人を神様だと思えなかった。なぜなら思い描いていた神様と違ったからです。

たとえ知識があっても、識別、区別が大事です。そうしないと混乱する可能性があります。

・📖 （読む）「師と弟子」　１１頁下段Ｌ１７～１２頁上段Ｌ３

*聖典に、水は神の姿である、と書いてある。しかし、ある水は祭事に用いるのに適し、ある水は顔を洗うのによく、そしてある水は皿や汚れた布を洗うのにしか使えない。この最後の種類は、飲んだり祭事に使ったりすることはできない。同じように、神は確かにすべての人―信心深くても不信心でも、正直でも不正直でも―のハートに宿ってはおられるが、人は不信心な、邪悪な、不純な人とつき合ってはいけない。親しくしてはいけない。彼らのある者たちとは言葉ぐらいは交わしてもよいが、ある者たちとはそれもしてはいけない。そのような人びとからは遠ざかっているべきである」*

（解説）

人間関係についてのとても大事な助言です。『福音』の中には、神様のことだけでなく、生活についての実践的なヒントがあります。シュリー・ラーマクリシュナは３種類の水の例を使って、人に対する接し方説明をしています。

先ほど説明したヴャーヴァハリカの見方です。

**人を３つの種類に区別するが、誰をも憎まない**

①絶対に避けないといけない相手

②仕事のときなど、必要なときに話だけをする相手

③深い人間関係を作るべき相手

人は大体この3つのタイプに分けられます。しかしたとえ避けるべき悪い人に対しても、憎しみを持ってはいけません。すべての人に憎しみを持たないでください。悪い人の中にも神様はいますが現れが少ないだけです。その人の本性は、本当はきれいです。魂はきれい。悪い人の問題は、心です。ですので、もしその人の心が変化しますと、その人は聖者になり得ます。そのことを考えて、憎しみを持たないでください。避けることは必要ですが、憎しみ、批判はやめてください。

おなじ生き物でも、虫、動物、人間、聖者、神様の化身、ではブラフマンの現れのレベルがバラバラです。また、机などのモノの中にはブラフマンはあっても、現れていません。

（第37回『福音』勉強会）以上